温故知新 北海道大学

挑戦の140年

SCENE-15

1907-1950

「大学予科」

3

2

1

9

7

8

10

6

5

4

1. 予科教授青葉萬六（1912年ころ、大学文書館蔵）
2. 予科教授有島武郎（1912年ころ、大学文書館蔵）
3. 予科ドイツ語教師ハンス・コラー（1912年ころ、大学文書館蔵）
4. 予科ドイツ語教師ヘルマン・ヘッカーの家に集う予科生（1930-40年代、大学文書館蔵）
5. 旧制高等学校・予科35校の徽章（大学文書館蔵）
6. 中央ローンで寛ぐ予科生（1940年ころ、大学文書館蔵）
7. コラーが伝えた一本杖スキーの練習（1917年、大学文書館蔵）
8. 東北帝国大学農科大学の正門と予科教室（1910年ころ、大学文書館蔵）
9. 予科生の教練（1911年、大学文書館蔵）
10. 予科記念碑「大志を抱いて」（2015年撮影）

Hokkaido University HISTORY 1907-1950

1907年	9月	東北帝国大学農科大学設置、附属大学予科開設
1908年		この年、予科ドイツ語教師ハンス・コラーが一本杖スキーを紹介
1911年	10月	予科生と教員の親睦団体「桜星会」結成
1918年	4月	北海道帝国大学附属大学予科へ改組
1920年	3月	桜星会歌「瓔珞みがく」発表
1923年	5月	北海道帝国大学予科と改称
1936年	6月	元予科主事青葉萬六胸像建立
1941年	2月	桜星会を桜星報国会に改組
1945年	10月	予科に陸海軍関係諸学校出身者が転入学 報国会解散
1947年	4月	予科に女性3名が入学
	9月	北海道大学予科に改称
1949年	5月	新制北海道大学設置
1950年	3月	予科廃止

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

東北帝国大学農科大学附属大学予科

札幌農学校が東北帝国大学農科大学として大学に昇格した一九〇七年、同時に農科大学に「予科」を附属して開設した。札幌農学校にも、本科で学ぶための準備課程として「予修科」、「予習科」などがあったが、これらは中学校自体の整備が十分でなかった時代にあって、中学校の課程を補習しつつ、さらに本科で学ぶための水準に学力を引き上げる役割を果たす、ある意味では制度上イレギュラーな存在であった。東北帝国大学農科大学の予科は、戦前の教育制度では高等学校に相当する。

戦前、大学に至る最もオーソドックスな進学ルートは尋常小学校（六年）―中学校（五年）―高等学校・予科（三年）―大学（三年）であった。高等学校は、「一高」と略称される第一高等学校（東京）、二高（仙台）、三高（京都）、四高（金沢）、五高（熊本）、六高（岡山）、七高（鹿児島）、八高（名古屋）のいわゆるナンバースクールに代表される、大学進学のための学校であった。全国の高等学校の総定員は大学の総定員と大きな差がないため、高等学校に入学すれば大学へ進むことは難しくなかった。受験戦争は中学校から高等学校への進学の段階で終え、高等学校三年間は大学へ進学するエリートを養成する課程であったと言える。

外国語三昧

高等学校に相当する東北帝国大学農科大学の予科の一九一二年のカリキュラムを見ると、三年間合計の単位数が多い順に、ドイツ語二十二単位、英語十六、数学十一、兵式体操九、化学八、物理学六などとなる。この他、図画、動物学、植物学、測量、国語、修身、地質・鉱物学の教科がある。いずれも大学進学後に農学を専門的に学ぶための基礎教科である。特にドイツ語・英語の外国語単位数の多さが顕著で、予科三年間で全九十七単位を学ぶ内、三十八単位、約四割を占める。さらに、数学や地質・鉱物学では英語のテキストを使用し、植物学はドイツ語による講義もあったという。予科時代の外国語三昧は、大学進学後に外国語を駆使して専門分野を学ぶ準備であった。

この時期に予科生であった中島広吉は「予科では外国語の時間が非常に多く、毎日二時間か三時間はあったので、その予習に辞書を引くのに追われて、数学等の方に手が回らなかった。」と回想している。同じく栃内吉彦も「予科の学課は吾々には相当重荷だった。［中略］ぎゅうぎゅうときたえられ、割合よく勉強した。三年間の予科生活がそろそろ鼻について倦怠期に入ったころ、いいあんばいに本科に進んで角帽をかぶり、専門の講義に新たな興味をかきたてられることになった。」と回想している。

予科の名物教師たち

高等学校・予科で学生生活を送るのは、十七、八歳から二十歳代前半の多感な時期の若者が多く、高等学校・予科の教員たちは良き導き手であった。東北帝国大学農科大学の予科の場合、青葉萬六（物理、一九〇七～三七年在職）は「青萬」と渾名され予科生の信頼が厚く、後に卒業生が胸像を建立したほどであった。有島武郎（英語、一九〇七～一五年）はW・ホイットマンの詩やシェークスピア、コナン・ドイルのほか、T・カーライル、P・クロポトキンなどを授業や課外の講読会のテキストとして取り上げ人気を博した。溝淵進馬（修身、一九〇八～一一年）は健康増進のため予科生に体操、特に柔道を奨励し、日曜日には学生を誘って茨戸・銭函・真駒内などに遠足に出掛けた。ドイツ語教師のスイス人ハンス・コラー（一九〇八～二五年）は、学生に合唱を指導して北大音楽部のルーツとなったほか、日本の最初期のスキー紹介者でもあった。北海道帝国大学予科になってからも、宇野親美（国語、一九二四～四九年）、鈴木限三（植物学、一九二二～四三年）、ヘルマン・ヘッカー（ドイツ語、一九三〇～四九年）など、名物教師といわれる教員が多かった。予科生は放課後や休日にもこれら予科教員の家を尋ねたり、課外活動を行なうなど、強い紐帯感の中でさまざまな影響を受けた。

予科三年間、大学三年間の学生生活

東北帝国大学農科大学そして北海道帝国大学の予科は北大への進学を前提としている点が、高等学校と異なった。旧制の北大生の多くが予科三年間、大学三年間の計六年間を同じキャンパスで過ごした。こうした予科を有する帝国大学は、他には台湾にあった台北帝国大学、朝鮮にあった京城帝国大学のみであった。北大キャンパスでは長く濃い師弟関係・同窓関係が結ばれていた。

北大の予科は、戦後の新たな教育制度への移行に伴って一九五〇年に廃止となった。二〇〇四年、予科卒業生が中心となってキャンパス内に北海道大学予科記念碑を建立した。石碑には「大志を抱いて」と記されている。

当時の予科生には学風を慕って集るもの、専門分野で特の数があったと思う。それでこそ静かな学園の中にあっ別の教授に私淑したいがために集るもの、海外雄飛を胸に秘めて集まる者など、相当て予科の空気には活気がみなぎり、迫力を感じたのである。（尾崎紫朗、1915年予科入学）